

ニート問題と社会的自立像組みかえの歴史的射程

中西新太郎

1 政策言語としての「ニート」普及の背景と効果

1-1 「ニート」問題が位置づけられる社会的・歴史的文脈

* 90年代末以降の日本社会の変動を背景に案出された特有の政策言語としてのニートは、青年問題把握の焦点を、いわゆる *school to work* の移行問題に移してゆく文脈上にある。すなわち、成長の困難に焦点を当てた教育課題から、職業的社会化に焦点を当てた社会的自立の課題へと問題把握の重心を移動させる流れの一環にある。

* したがって、不登校やいじめ等が教育問題の枠内で語られてきたかつてのプロブレマティクとニートのそれとは議論の位相を異にする。(教育の失敗から教育の限界へ)

* 職業的社会化に焦点を当てた社会的自立課題は、当然ながら、「ニート」問題に尽きるものではない。

1-2 青年問題把握の焦点移動を促している背景

* 学校教育をつうじての社会化過程内に進路・職業選択が組みこまれてきた高度成長期以降の社会化様式(乾彰夫氏のいう日本型青年期)が終焉を迎えつつあること。そしてその結果、職業体験や職業選択を中核にふくむ社会的自立のコース、形態が固有の課題として鋭く意識されるようになったこと。

* 社会化様式のこうした変化は、日本型経営の転換に象徴される社会・経済変動に規定されている点で学校教育にとって外在的であること。

1-3 青年政策の追求

* この転換は学校教育の内容と制度とに大きな変化を迫ると同時に、「社会への出方」を固有の対象とする青年政策の整備を不可欠とする。フリーターの激増が社会的話題を呼んだ97年以降の「若者」論議は、社会的引きこもりをめぐる議論もふくめ、大局的には、上に述べた固有の青年政策がどのような理念、ロジックによって構築されるべきか、構想できるかを問題にしてきた。

* 人間力を強化を謳った経済財政諮問会議「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2002」もふくめ、以下のように矢継ぎ早に打ち出された青年政策、政策研究群にニュアンスのちがい(青少年の逸脱問題対策か、進路選択・就業支援かなど)はありながら、全体としては上記の性格を色濃く帯びるものといえる。

①内閣府「人間力戦略会議研究会報告」(2003年4月)

②内閣府「青少年の育成に関する有識者懇談会報告」(2003年4月)

- ③若者自立・挑戦戦略会議「若者自立・挑戦プラン」(2003年6月)
- ④青少年育成推進本部「青少年育成施策大綱」(2003年12月)
- ⑤労働政策研究・研修機構「若者就業支援の現状と課題」(『労働政策研究報告書 No.35』2005年6月)
- ⑥内閣府「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会報告」(2005年6月)
- ⑦「若者の人間力を高める国民会議」2005年

1-4 ニート言説のスティグマ付与効果

*ニートを論じる言説が「ニート」とされる若者たちの意欲不足や「人間力」欠如を非難するか否かにかかわらず、ニート言説が流布する過程で、「ニートであること」に深いスティグマが付与される状況が生じた。

この結果、親世代のあいだで、ニートに陥らぬための方策のみを気にかける緩慢なモラル・パニックがすすむとともに、青年層のあいだでもニートを逸脱の一形態とみなす意識が生じている。

*スティグマ付与効果の点でニート言説とフリーター言説には共通性があるものの、前者は、社会に出ること自体の忌避・拒絶という点でスティグマの度合いが深く、社会的引きこもりへのスティグマ付与との共通性を強くもっている。

*ニートになるのは本人の問題と意識され、「社会に出る意欲のなさ」という内面に着目するニート言説は、脱ニートの努力を家庭に求める意識を醸成しているようにみえる。野村総研「ニートに関するアンケート調査」(2004)ではニートにたいする取り組みで一番大切なものとして「家庭教育の見直し、コミュニケーション充実」がトップになっている(38.6%)。

1-5 フリーターからニートへの焦点移動?

*青年問題のニート問題への焦点化はフリーター対策とニート対策のあいだに政策的分断をもたらす可能性がある。この焦点移動は、「働かない、働こうとしない人間を働けるように変える」ことに政策上の注目が集まることで、非正規であれ何であれすでに「働いている」若者たちにたいする注目や配慮を相対的に低下させる。

*⑤に指摘されている「周辺フリーター」などを考慮するならば、有業と無業のあいだに「万里の長城」が築かれているわけではない。日本版ニートの定義にさらに「働く意欲の欠如」という指標が加わることによって、「働く—働かない」という分断基準が強い社会的意味を帯びるようになった。

2 ニート問題を読み直す視点

2-1 ニート問題だけを切り離してとらえるべきではない。

* 日本版ニート問題に特徴的な位相として「社会に出られない（出にくい）」状況と心性とを挙げることができる（3節）が、職業的社会化をふくめた社会化様式全般の変動がもたらしている影響の一環としてとらえるべきである。

* したがって、「特異な困難」としてニート問題を特化させる視点に立つべきでないこと。

* フリーター、ニート、アルバイトそれぞれにかかわる固有の問題があるとしても、就業の困難等、職業的社会化にかかわる問題群としては包括的にとらえるべきである。

そのさい、「働ける—働けない」という区分ではなく、「安心して働ける—安心して働けない」という区分にもとづく問題の立て方が必要であること。安心して働ける世界への接近過程として「半端な働き方」を組みこむプログラムが考慮されてよい。

2-2 社会化過程に現に出現している格差、階層性、ジェンダー・トラックの差異を踏まえるべきこと。

* 日本型青年期における競争とは異なる「競争—選別」状況、格差的社会化は、従来からの学校間格差のみならず、学校と家庭との距離、進路選択における家庭の役割、社会化過程上でのバイト経験の位置等々に反映されている。（小杉礼子編『フリーターとニート』2005、第1章、都立大学教育学研究室『「世界都市」東京における若者の〈学校から雇用へ〉の移行過程に関する研究』2003、「進路多様校における高校生の進路選択の背景にあるもの」）

* 専業主婦願望の終焉（「結婚したら家庭に入る」7.2%／ベネッセ「高校生は変わったか」2003）にもかかわらず、ノン・エリート女性の社会化過程、ライフコースについては従属的、表層的に扱われるのみ。他方、「モテ」「名古屋嬢」等の文化表象にはジェンダー・トラックの階層性が鋭く反映され、階層化されたトラックのイメージ形成が進行している。

2-3 〈正統的自立—逸脱〉類型の再検討が必要であること。

* 正統的自立像内の「隠されたカリキュラム」であった「一人前の労働力」としての陶冶・訓練・送り出しに社会的・政策的な焦点が当てられることによって、自立をめぐる言説には、労働力陶冶にかかわる政策的含意がつねに付随する。教育の自律性といった「バ

リアー」が衰弱する。

*現実の社会化過程に関与する多様なアクターについて、それぞれの役割・影響力や持ち分の検討を行うことが必要であり、この検討をつうじて何が正統的で何が逸脱であるか再定義されねばならない。

多様なアクターとは、非学校的「リクルーター」や公共・半公共サポートシステム、逸脱統制機関、フリーペーパーなどの情報回路、ピアグループ、インフォーマルな関与者、インフォーマルな情報ネットワークなどを指す。

なお、そうしたアクターはそれぞれが関与する対象者と「一体」をなしている。(支援のダイナミクス)

2-4 「中立的観察者」のアプローチによってニートとされた対象者の現実を読みとるのは困難であること。

*ナラティブとして語られた状況の多義性を職業的社会化過程における困難の内面化として一面的に解釈することの危険性

とりわけ、正統的自立像にそって「意欲のなさ」、「希望のなさ」が解釈され、克服の対象(夢をもたせる)とされることの無力と危険(社会政策のカルト化)

2-5 社会的自立の像を問い直し、新たな自立像を構想すること形成すること

*社会的自立像の組みかえとは、社会化の到達点(大人になること、一人前になること)を、現実の内容としてもイメージとしても、既存のかたちにとどめ固定せずに「ずらす」こと、変化させること。若者の側に一方的に「こういう力を身につけるべきだ」と要求し統制するのではない社会化様式、自立過程を構築すること。

*社会的自立像の組みかえは、二重の縁辺化状況におかれた若者たちの現実にもくし、その現実の下でなお生きられるような像として構築されるべきである。正統的自立像、したがって逸脱の定義も組みかえられねばならない。若者たちが現におかれているその場所でどうすれば今までよりもスпойルされず抑圧されずに生き働けるのかを追求しつたえることが重要である。

たとえば、フリーターとして豊かに一生を全うするための制度、社会経済、社会文化条件とは？

*社会的自立像の組みかえは、自立過程・様式を日本型青年期のそれに引き戻すという観点からではなく、新たな、そして望ましい自立過程・様式が若年層の現実にもくして生み出されるべきだという観点に立つべき。したがって、学校教育をつうじての社会化が機

能不全に陥りかけている状況についても、従来の学校教育を単純に維持する視点から問題を立てるのでは不十分であること。

3 「社会に出られない」困難の深度・歴史的射程

3-1 「社会に出られない」状況をつくりだしている直接的原因としての経済的縁辺化

*生活保護基準をはるかに下回るフリーターの収入水準が示すように、若年層のあいだで「普通」となった非正規就業（15歳～24歳の非正規・失業者比率、男36%、女44%／労働力調査2005、1-3月）における低処遇は膨大な若年労働者をワーキング・プア化している。

*経済的縁辺化への対処を欠いた自立支援はピックアップ型のスキームにならざるをえない。

*社会化の到達点におけるこの状況が若年層の行動と意識に全体として大きな影響を与えており、90年代後半からの意識変動を出現させた。（「努力すればだれでも成功できる社会だとは思わない」75%／読売新聞世論調査部『素顔の十代』2003、など）

3-2 内面的縁辺化の回路と拡散・肥大化

*この意識変動は、個人々々の生活—人生の意味づけを深部から揺さぶり変容させる質をそなえている。就業にせよ結婚にせよ、生活問題の「解決」は、各人の現実的生活にそくして生の意味を了解させ得心させる「深み」へとつながっている。

*縁辺化に意識上で対処するために動員される関係資源としての友人関係、家族縁辺化をくぐり抜ける努力の特異なきびしさとして〈個体化—同調〉機制が存在しており、この機制は学校の正統文化内に融合させられた友人関係（「社会」関係）の内側で作動している。関係資源の動員可能性をめぐる分岐と社会化を断念させる心性の拡散とがここから生じる。

→セキュリティ・ネットとしての友人網（平均友人人数57.15人／中村泰子『10代のぜんぶ』ポプラ社、2004）

→友人関係の維持にはたらく配慮・葛藤メカニズムについては数多くの知見、調査がある。

*家族による対処についても、家族という関係資源の動員可能性をめぐる分岐（階層性を反映した分岐）が生じるとともに、自立課題の家族内への閉じこめが生じうる。

*社会からの離脱・退出に向けて「社会化」されるような矛盾の顕在化はライフコース上で社会圏の再編が余儀なくされるごとに生じる。

3-3 内面的縁辺化の表現としての「非社会性」

*内面的縁辺化のこうした機制をつうじて社会的無力性の表現としての「非社会性」が出現している。「非社会性」にかんするさまざまな言説、文化表象は、この意味で、読み直されねばならない。

*ニート言説のうちでとりわけ強く焦点化されている「非社会性」がニートを特異な「弱者」にみせているが、こうした内面的縁辺化、「意欲喪失」や「希望のなさ」は社会的上層へのピックアップルートに乗らない（乗ろうとしない）若者すべてに共有されているエートスといえ、さまざまな文化表象において一般化している。

→「俺に野望はない。今のところ夢もない。大志もなければ望みもない。ただ、それなりに生きていければいいと思ってる。それが俺だ。……そこんどこ、わかったか？」（片山憲太郎『電波的な彼女』集英社スーパーダッシュ文庫、2004）「清く慎ましい小市民」の追求（米沢穂信『春季限定いちごタルト事件』創元文庫、2004）

3-4 生のミニマリズムが示す問題の歴史的射程

*青年層における生のミニマリズム（社会的閉塞度合いにみあう生の縮減）は、社会からの退出すなわち自死にまでいたるなめらかな線上で現在の生を制御し縮減するエートスと技法であり、共時的にも通時的にも動員できる資源の多寡に応じて極小の範囲にまで生活を切り縮られるような文化を「創造」する。ここでは、希望の過小が「いま」を律し、それでも生きられる世界の形成へと向かわせる。

*ニート言説における「非社会性」とは、引きこもり者のそれと重なる生のミニマリズム実践を反映するものといえる。

*この次元における社会化の困難を「希望のクールダウン」や「意欲の喚起」策によって解決することはできない。ニート言説に映し出されている自立の困難は、自立課題の孕む歴史射程が企業社会秩序からの転換にともなう能力開発理念の再編という短いスパンにとどまらぬものであることを示唆している。

*個体能力観にもとづく「社会性」の陶冶・訓練が限界をもつだけでなく逆効果にさえなりうることも、上記のことから推測できる。なぜ社会的自立のために自分が「能力」を

つけねばならないのか、その関係を了解するためには、より深く長い射程を備えた幸福追求の展望が一人ひとりの内に存在しなければならない。幸福像言い換えるなら個人々々の生の次元にまで具体化されうるユートピア像の彫琢を抜きにして「能力」をつけさせることはできない。

3-5 「バーチャルな生」の幸福は生のミニマリズムをどれだけ補填しうるか？

4 学校教育とのかかわりでニート問題を考える

4-1 現在生じている社会化様式の変化は「教育の失敗」というよりも教育のなしうる限界を浮き彫りにしている。

4-2 現実の社会化過程にとって迂回手段として利用される教育システム

* 「とりあえず専門学校へ行く」ような迂回経路は学校と出口としての社会とが峻別されていた時代のモラトリアムとは異なり、蚕食的社会化の回路になっている可能性がある。学校と社会との既存の境界線は意識上でも消失し始めているようにみえる。

* 教育システムのこの意味での位置変化は、就業とより直接に結びつく訓練・陶冶への教育機関、教育内容の変化を促進する。

4-2 ポジティブな内面の陶冶という幻想

* 社会的自立像を組みかえることなく「社会に出させる」訓練・陶冶がすすめられる場合、たとえば、コミュニケーション「能力」の陶冶がサービス領域でのコミュニケーション・スキル訓練に収斂されるといった危険性が生じる。そうした、「性格の外向化」トレーニングは個人単位のより緻密できびしい内面統制を導く可能性があり、人格を乖離させる技法を逆機能的に若者たちに身につけさせる。